

平成 20 年 6 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：平成 18 年度～平成 20 年度  
 課題番号：18720109  
 研究課題名（和文） 東アジアにおける手話言語の語彙比較研究：台湾手話・韓国手話に対する日本手話の影響  
 研究課題名（英文） Lexical Comparison of Sign Languages in East Asia: Japanese Sign Language's Influence on Taiwan Sign Language and Korean Sign Language  
 研究代表者  
 佐々木 大介（SASAKI, DAISUKE）  
 北星学園大学・文学部・講師  
 研究者番号：00405648

## 研究成果の概要（和文）：

科学研究費の支給を受け、東アジアにおける手話言語、日本手話、台湾手話、韓国手話の語彙比較研究を行なった。データ収録のためのハイビジョンカメラ、データ分析のためのコンピューターなどの機器を購入したほか、データ収集のために韓国に2度訪問した。これらの研究の成果は、2007年刊行の書籍に論文を寄稿したほか、5回の学会発表（うち国際学会2回）で報告した。

## 研究成果の概要（英文）：

I compared the lexical items of sign languages in East Asia, namely, Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language, and Korean Sign Language. Besides purchasing equipments including an HD camcorder for data recording and computers for data analysis, I visited Korea twice to collect data from native deaf signers of Korean Sign Language. An article appeared in a book published in 2007, and I presented five papers at conferences (three domestic and two international).

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,900,000	0	1,900,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	270,000	3,670,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学・手話言語学・日本手話・台湾手話・韓国手話

## 1. 研究開始当初の背景

市田（2002）や Nakamura（2000）などが指摘するように、日本手話、台湾手話、および韓国手話の間には語彙的な類似性を見い出すことができる。これには歴史

的な理由があるとされる。すなわち、大日本帝国政府が19世紀末から第二次世界大戦中に行なった植民地支配により、これらの地域に何らかの形で日本手話が持ち込まれ、結果として現地の手話言語に影響を与

えたと推測される。台湾の場合、大日本帝国政府による植民地支配（1895年から1945年まで）の間、1915年に台南盲啞學校が設立され、1917年には台北に木村盲啞教養所（後の台北盲啞學校）が開設された（Smith 1987a）。さらに、台北の学校には東京聾啞學校から、台南の学校には大阪市立聾啞學校から、それぞれ教師が派遣され、台北方言と台南方言が現在観察されるきっかけとなった（Smith 1987b）。一方、韓国の場合も、竹内（1997）や岩井（2002）が指摘するように、上に述べた台湾の場合と同様の状況が窺える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、東アジアにおける手話言語、すなわち、日本手話、台湾手話、および、韓国手話の語彙比較研究を音韻的観点から行なうことである。究極的には、各手話言語で現在使われている形態から日本手話の古形（あるいは祖形）を再建することを本研究の目標とする。後述するように、現代の台湾手話および韓国手話は古日本手話の特徴を保持しているため、「古日本手話」における語の再建は可能であると考えられる。音韻的相違がどの音韻パラメーターに観察されるのか、また、音韻的相違が観察されるのはどの音韻パラメーターにおいてより顕著であるのかを研究することにより、第二次世界大戦以前の日本手話が語彙的にどのようなすがたをしていたのかを明らかにするのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

これまでの先行研究（佐々木 2001, 2002, 2005c; Sasaki 2005a, 2005b）では市販の手話辞書を言語データとして使用してきた。しかし、同時に、市販の手話辞書をこの種の研究の言語データとして使用するにはいくつかの問題点があることも指摘してきた。それは、使用した手話辞書が紙媒体をベースにしたもので、空間上に3次元で表現される手話を紙上に2次元で描かれたイラストレーションから正確に読み取るのは困難な場合があり、信頼性の点で問題があるという点である。

この問題点を克服するには、手話母語話者（ろう者）から言語データをビデオ収録によって直接収集する以外に解決策はない。精密な言語データを収集するには、ビデオカメラによって言語協力者（インフォーマント）からの言語データを記録することが不可欠である。記録された言語データは、動画を扱うソフトウェアを使用し、コンピューター上で分析を進める。また、言語データとなる動画は、ハードディスクまたは DVD などの光ディスクに保存

する。

言語データは、日本手話、台湾手話、韓国手話の手話母語話者をそれぞれ以下の3つのカテゴリーに分けて収集する。

- (1) 1945年以前にろう学校に在籍したろう者
- (2) (1)の家族、または、(1)と直接交流があったろう者
- (3) 若年層のろう者（20歳代から30歳代）

(1)に関しては、高齢ゆえ多くのろう者は亡くなってしまっているという指摘があるが（岩井智彦氏との個人談話、2002年6月）、日本手話が持ち込まれていた当時の状況を知る手話母語話者からデータを直接収集することは欠かせない。また、日本手話母語話者については、台北の学校には東京聾啞學校から、台南の学校には大阪市立聾啞學校から、それぞれ教師が派遣されているため、これらの学校に1945年以前に在籍したろう者からデータを収集する。(2)に関しては、上に述べたように(1)に該当するろう者は亡くなってしまっている者が多いことから、このようろう者の状況を二次的にでも垣間見ることができ的可能性があり、(2)に該当するろう者からもデータを収集する。(3)に関しては、(1)に該当するろう者が用いる手話と若年層のろう者が用いる手話の間には語彙的な相違が観察される可能性があるため、(3)に該当するろう者からデータを収集することは有意義である。また、そのような相違が観察される場合には、その手話言語内部における歴史的な変化を知る上で重要である。なお、日本手話母語話者に関しては、これらのカテゴリーのほか、地方に住む日本手話母語話者からも言語データを収集する。これは、柳田（1930）の「方言周圍論」にあるように、古い形態が辺境部に残っている可能性があるためである。実際、和歌山地方のある日本手話母語話者から、台湾手話の「妹」にあたる形態をその母語話者の祖母が使用しているという指摘を受けた。このような指摘もあることから、地方に住む日本手話母語話者からも言語データを収集し分析することは非常に有意義である。また、言語協力者の数は、各言語の各カテゴリーに対して4名（男女2名ずつ）とする。

実際に抽出する言語データは、以下の4種類の語彙リストを使用して収集する。

- (a) 改訂版スワデッシュ語彙リスト（100語; Woodward 1978, 2000）
- (b) McKee and Kennedy（2000）による199語の語彙リスト
- (c) 市販の絵カード（約200語; Guerra Currie, Meier, and Walters 2002）
- (d) 先行研究において「音韻的に類

似」と判断された手話単語のリスト(約200語)

(a)と(b)に関しては、手話言語の語彙比較研究において、先行研究とどの程度の相違があるのかを確認するため、すでに先行研究で使用されている語彙リストを本研究でも使用することは重要である。また、(c)についても先行研究との比較という点で有意義だが、(a)や(b)では語彙が文字で提示されるのに対し、(c)では絵で提示されるという点で異なる。つまり、(a)や(b)の語彙リストでは音声言語による干渉が入る可能性があるが、(c)の絵カードではそのような可能性を回避することができ、手話言語のように文字を使用しない言語の語彙比較の調査で絵カードを使用するのは妥当である。最後に、自身の先行研究において「音韻的に類似」と判断された手話単語を(d)の語彙リストにまとめ、併せて語彙比較研究を行なう。

#### 4. 研究成果

〔平成18年度〕

本研究計画の初年度にあたるため、設備備品を購入する必要があった。手話言語は、音声言語とは異なり、視覚および空間というモダリティーを使用するため、手話母語話者(ろう者)から直接収集する精密な言語データは、ハイビジョンビデオカメラによって記録することが不可欠である。記録された言語データは動画を扱うことが可能なソフトウェアを使用してコンピューター上で分析を進め、言語データの動画はハードディスクやDVDなどの光ディスクに保存する。これらの作業を行なうため、ビデオカメラ一式(ソニー社製デジタルハイビジョンビデオカメラ)およびコンピューター一式(アップル社製デスクトップコンピューター。モニタなどの付属品を含む)、データ保存用の外付けハードディスクのほかに、動画を観るための装置一式(テレビ)などを購入した。また、消耗品としてビデオテープ、DVDディスクなども購入した。これらの設備備品のほかに、手話言語学研究に関連する書籍を多数購入した。

実際の研究計画としては、諸般の理由により、国外に赴いてデータ収集を開始するには至らなかったが、2006年12月には、手話言語学界において最大の研究大会である「手話言語学研究の理論的問題」(TISLR: Theoretical Issues in Sign Language Research)第9回大会(ブラジル・サンタカタリーナ連邦大学 Universidade Federal de Santa Catarina)において研究発表を行なった。また、この研究発表による渡航に相前後して、アメリカ国内において、図書

購入を含む資料収集を行なった。一方、国内では、日本手話学会を含む諸学会への参加に加え、日本手話の言語データを収集し、また、日本手話に対する知見を得るためセミナーなどにも参加した。

〔平成19年度〕

本研究計画の2年目に当たる。平成18年度にデータ分析をするための設備備品を購入したため、平成19年度は大がかりな設備を購入することはなかったが、消耗品としてビデオテープやDVDディスクなどを購入した。

平成19年度は、平成18年度に果たせなかったデータ収集を開始し、韓国および台湾に赴いた。現地ではデータを収集したが、特に韓国では、現地で市販されている韓国手話関連の書籍・辞書類を多数購入した。

自身の研究については、日本手話学会第33回大会において「台湾手話および韓国手話の語彙比較研究」という題目で口頭発表を行なった。また、2007年秋にギャロデット大学出版(Gallaudet University Press)から出版された*Sign Languages in Contact*(手話言語の接触; David Quinto-Pozos 編)に“Comparing the Lexicons of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Preliminary Study Focusing on the Difference in the Handshape Parameter”(日本手話および台湾手話の語彙比較: 手形パラメータの違いに関する予備研究)という1章を寄稿した。その他、日本手話に対する知見を得るためセミナーなどにも参加した。

〔平成20年度〕

本研究計画の3年目かつ最終年度に当たる。平成18年度にデータ分析を進めるための設備備品を購入しており、平成20年度は、現地調査で使用するノートパソコン以外は大がかりな設備を購入することはなかったが、消耗品としてビデオテープやDVDディスクなどを購入した。

平成20年度もデータ収集を継続し、科学研究費を使用して韓国に赴いた。韓国では、韓国聾啞人協会(Korean Association of the Deaf)の協力を得、朝鮮総督府下のろう学校通学者1名を含む計10名のろう者からデータを収集した(台湾へも別途研究費を使用して訪問し、中華民國聾人協會(National Association of the Deaf in Taiwan)の協力を得、臺灣総督府下のろう学校通学者5名を含む計17名のろう者からデータを収集した)。

自身の研究については、海外で2件、国内で1件の発表を行なった。2008年6月には、

アメリカ・コネチカット大学で開催された The Phonetics and Phonology of Sign Languages: The First SignTyp Conference において、“How Should We Define ‘Similar’ Signs?: A Preliminary Study” (「類似する」手話をどのように定義すべきか?: 予備的研究) という題目でポスター発表を行なった。また、2008年7月には、韓国・高麗大学校で開催された The 18th International Congress of Linguists において、“The Lexicons of Sign Languages in East Asia: A Preliminary Comparative Study of Japanese Sign Language (JSL), Taiwan Sign Language (TSL), and Korean Sign Language (KSL)” (東アジアにおける手話の語彙: 日本手話 (JSL)・台湾手話 (TSL)・韓国手話 (KSL) の予備的比較研究) という題目で口頭発表を行なった。国内では、2008年9月に神戸研究学園都市大学交流推進協議会 Unity で開催された日本手話学会第34回大会において、「『似ている手話』とはどのように似ているのか」という題目で口頭発表を行なった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

- (1) Sasaki, Daisuke (2006). “Why So Similar? Lexical Comparison of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language (そんなに似ているのはなぜ? 日本手話と台湾手話の語彙比較研究).” Paper presented at the Ninth International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research, Universidade Federal de Santa Catarina, Florianópolis, Santa Catarina, Brasil, December 6-9, 2006.
- (2) 佐々木大介 (2007). 「台湾手話および韓国手話の語彙比較研究」. 日本手話学会第33回大会, 日本社会事業大学, 2007年9月15-16日 (『日本手話学会第33回大会予稿集』, 21-24ページ).
- (3) Sasaki, Daisuke (2008a). “How Should We Define ‘Similar’ Signs?: A Preliminary Study (「類似する」手話をどのように定義すべきか?: 予備的研究).” Poster presented at The Phonetics and Phonology of Sign Languages: The First SignTyp

Conference, The University of Connecticut, Storrs, Connecticut, U.S.A., June 26-28, 2008.

- (4) Sasaki, Daisuke (2008b). “The Lexicons of Sign Languages in East Asia: A Preliminary Comparative Study of Japanese Sign Language (JSL), Taiwan Sign Language (TSL), and Korean Sign Language (KSL) (東アジアにおける手話の語彙: 日本手話 (JSL)・台湾手話 (TSL)・韓国手話 (KSL) の予備的比較研究).” Paper presented at the 18th International Congress of Linguists, Korea University, Seoul, Republic of Korea, July 21-26, 2008.
- (5) 佐々木大介 (2008c). 「『似ている手話』とはどのように似ているのか」. 日本手話学会第34回大会, 神戸研究学園都市大学交流推進協議会 Unity, 2008年9月14-15日 (『日本手話学会第34回大会予稿集』, 11-14ページ).

〔図書〕(計1件)

- (1) Sasaki, Daisuke (2007). “The Lexicons of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Preliminary Comparative Study of Handshape Differences (日本手話および台湾手話の語彙: 手形の違いに関する予備的比較研究).” In: Quinto-Pozos, David (ed.), *Sign Languages in Contact (Sociolinguistics in Deaf Communities, Volume 13)*, pp. 123-150. Washington, D.C.: Gallaudet University Press.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 大介 (SASAKI, DAISUKE)

北星学園大学・文学部・講師

研究者番号: 00405648